

学生探検の意義

重 兼 亘

現代における探検とは何を意味するか。

具体的にどのようなものを探検と呼ぶのか。

これは我々探検部員が常に考え、常に議論し、そのつきるところを知らぬ向類である。近藤リーダーより部報編集を命ぜられ他の編集係 部員諸君とその任に当り投稿原稿を整理している途中で偶然小野氏の「探検試論」を読ませていただいた。ちよつと自分とは考え方が違つているので反対意見を書かせてもらった。普通反論は次号に載せるのが当然なのだが、そこは編集係の特権と自ら許しておえて本号に載せることにした。もちろん以下は私自身の探検部に対する考え方であつて部員諸君の中にも当然私の意見に反対の者もいるだろう。私の意見が正しくないと考える者は又反論を書くであらうし、このような紙面で部員相互が大いに自分の所信を述べ合うのもいいことだと思つのである。

「研究」、「勉強」などという言葉の実際的な意味を考えてみる時その内容にばいぶん広い範囲がこめられている様に思われる。

これらの言葉の表わす内容には表面的に見ても上は大学教授等学識者のそれから中学生が母親に小言を言われてしびしび机の前に坐つてするものまで含めて奥に多くのものを含めている。又その内容の程度においても著しい差が認められるしかしそれはその目的と行態の主体との間において充分意味をもつていゝものと思われる。中学生の行う、いわゆる基礎的な学習もやがては奥理探求の高度な研究への過程として欠くことのできない意味をもつていゝからである。

「探検」「調査」という言葉の意義も上述のように解釈できないものだろうか。専門家が行う探検及び調査と我々の部が行つていゝ様な「学生探検」とは裝備法、意義内容、程度等いづれ之矣においてもそれらには遠く及ばないであらう。

しかし「学生探検」にも未熟ながら学生が行うという点においてその意義が見い出せるのである。

小野氏は学術的な探検は学問的にバックアップされたものでなければその効果は望みがなく意味はないときめつけその証拠として将来を大学院に進まないと述べておられるがいかなる意味において大学四年間の活動の成果というものを否定されるのか自分にはその意味がわからない。大学院に進めば必ず充実した成果が上げられると限ったものでもないし、オー、在学年限によつて成果が増すものとも考えられない。小野氏の「大学四年間に何ができるか？」という考えは、即ちそのまま「人間の短い一生において何ができるか？」という反问とも受取れる。それこそ真理の探究へのしりぞみであり、小野氏のカ説するパイオニア精神の欠如であると思う。更に彼は人文的、文化的探検は学問的な基礎の上に立つた学者にまかせておき「学生探検」たるものは「登山探検」への道をとるべきだ、との意見であるが、大学在学期間では修得できない調査技術を登山においてのみは達成できるとの見解と見受けられるがこれは余りにも我田引水の粗雑な意見だと思ふ。

自分は登山の精神たるものがいかなるものであるか詳しくは知らない。しかし少なくとも体カやフアイトのみで達成できる程安易なものではないと思う。「未知の解明への憧れ」と表裏して、たゆまざる努力の結果はじめて成し遂げられるものであろうと考えるのである。

短い期間では何にも出来ないと考えている様な消極論者には少なくとも達成できるものではあるまい。ましてヒマラヤにおいてさえすでにその神秘のヴェールがはがされようとしている現在、ヒマラヤがすべて解明されたら小野氏は一体どこに探検の意義を見出すつもりなのだろうか？

小野氏は登山を学生生活への身近さからかんがみ学生探検の道を登山にとれと言うが、その様な見地から登山を奨励するのは、それはひとえに真の登山精神の冒瀆であろう。小野氏が部内において高度な登山技術の持ち主であり、無類の山好きである事は自分も充分認めるところであるが、自分の好悪を部という一つの集合体の中に反映させるのはまちがいであると思う。

我が関大探検部も発足以来まだ年数も浅いので、その含む目的、内容も漠然として部員それぞれが思い思いの探検の意義を見出そうと努めている段階にある。もちろん一つの部である以上まとまる事が望ましいが、適度期である以上現在の漠然とした状態も又仕方のないことだと思ふのである。

“登山に探検の意義を見出すもの。”

“社会科学的な生活調査に努力するもの。”

“考古学に興味を見出すもの。”等そのすべてが裏面目は気持で裏剣にその活動の対象に向つて邁進する時、漠然たる探検部というものの中にもおのづからその統一したものがやがては現れてくるだろう。

それは部の将来が解決してくれる問題である。ただ自分がここで強調しておきたい事は、“学生であるから。”とか“四年間は短かすぎる。”とか、“学問的に裏づけがなければ意味がない。”とか言ふ消極的な考えでだけは部に活動に当つて欲しくないということである。まして自分の主張する研究対象のみを正当として、他を軽べつするなどもつてのほかである。活動の結果は必ずしも卒業の時にあらわれるのではないのである。例え結果が表れてなくても、未解決の事としたまま卒業してもいいじゃないか。学内であるからこそ一つの部として集つてゐるが、その中に流されてゐる精神は部のわくの中におしこめられてしまうものではないのだ。部を卒業して出ていつても、それぞれの部員が、それぞれの方向にその精神をのばしていけばよいのだ。もちろん大学院に進み、更には生涯を学研としてささげようとする者も大いに望ましいし、卒業後それぞれの職業につく者も、その分野において、あるいはその余 において大いにその精神の発展につとめればよいのだと思う。

在学中の活動の精神を部員の一人一人が継していくところに大学クラブの活動の理想があり意義があるのではないだろうか。

「探検部は探検ををする部なのだ」それぞれの部員が、その信ずる方向に向つて努力すればよいのだ。探検部員たる者がその精神において消極的な見解をとり学識者の行うもののみを裏の探検とよぶならば「学生探検」には救いはあるまいし大学の「探検部」たるものの意味はなくなつてしまう。